

タイトル：平成 30（2018）年度 教育セミナー（第 14 回）

日時：2018 年 9 月 13 日（木）～16 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「神秘主義潮流の展開過程からみるペルシア文学の諸相—近年の研究動向からみえるもの」
藤井 守男（東京外国語大学）

近年のペルシア文学の研究動向においては、特に、神秘主義、及び、シーア派、イスマーイール派関連の分野で注目すべき動きがみられるが、そのいずれの底流にも、ペルシア文学を貫流する神秘主義の二つの潮流が深くかかわっていることがわかる。イブン・アラビー派神秘主義と、これ以前の古典的神秘主義潮流（ホラーサーン派神秘主義と呼ばれ、Jalāl al-dīn Muḥammad-i Balkhī の *Mathnawī* に代表される潮流)との相関、影響関係に関して、近年、イランでは、より包摂的な視野から論じる傾向が若干みられる。

従来より夙に注目されていた神秘主義テキスト *Makātib -i Quṭb b. Muḥyī* (ed.Mariyam Dāneshgar,2016,Farhangestān-e Zabān va Adab-e Fā rsī) の本格的校訂と注釈の刊行の意味合いは大きいといえる。西暦 14 世紀末の南西イラン（ジャフロム）において、「イフワーナーバード Ikhwān-ābād（同胞の地）」なる共同生活の場を設け、神秘主義の実践をおこなっていたクトゥブッディーン・ムフイーの書簡集には、Qutb（枢軸、要）へのこだわりを見せず、信徒をモリードとは呼ばず、スンナ派でありながら、シーア派のイマーム、ファーティマへの崇敬が示され、シーア派側からも好意的に受け入れられるなど、通常的神秘道の修養の形式にとらわれない教えが説かれている。また、西暦 15 世紀末から 16 世紀初頭のイラン南西部ファールスにおけるイブン・アラビー受容の具体的な姿を検証することも本テキスト通じて可能となろう。

『カーエミヤート詩集』“*Drwān-i Qā'imiyāt*” (ed.Seyyed Jalāl Ḥoseinī Badakhshānī,2011,2016, Introduction by Shafī'ī-ye Kadkanī, Mirtāh-e Maktūb)は、数世紀にわたって隠されてきたイスマーイール派のペルシア語テキストで、イスマーイール派と神秘主義文学の関係に関する見識の転換を迫る内容を見せる。イスマーイール派の政治的拠点アラムートにおいて「大復活」を宣言した Ḥasan 'Alā dhikri-hi al-Salām ハサン・アラー・ズィクリヒ・ツサラームとその息子ムハンマドを称えるペルシア詩(158 句)を、1223-1230 年頃に詠んでいる点で、これまでイスマーイール派信徒以外には知ることがなかった膨大なペルシア詩の存在の可能性を示すものである。本書の詩の中で、神秘主義詩人サナーイー (d.1134) を「ダーイー（宣教師）の灯りと王冠」と呼んでいる点は、ペルシア神秘主義とイスマーイール派との関係、さらに、神秘家アッターールとイスマーイール派との関係性にも一石投ずる重要な視点を秘めている。当初、二つの別の方向性を見せていた神秘主義詩とイスマーイール派の思想家・詩人は徐々に、接近し、アラムート壊滅後も、「神秘主義の許に身を隠した」のではなく、神秘主義詩がイスマーイール派の詩に表現上の影響を与えていたことが看取できる。今後、思想・文学の双方の分野からの検証が必要となろう。